

勝手口から 覗いた文壇人

天野哲夫 〔著〕



勝手口から 覗いた文壇人

天野哲夫 著

工業学院図書館
蔵書章

勝手口から覗いた文壇人

初 版 1997年10月30日発行

定価1600円＋税

著 者－天野哲夫

装 幀－荒木洋子

発行者－北川 明

発 行 株式会社第三書館

東京都新宿区大久保2-1-8

phone 03-3208-6668

組 版－(有)ミラクルプラン

印 刷－(株)平河工業

製 本－(株)難波製本

ISBN4-8074-9722-7 C0095

勝手口から覗いた文壇人／目次

愚行の三段飛び	偉大な通俗は偏狭な“純文学おたく”に勝利	5
何故、勝手口なのか	勝手口からの体感による闖入	13
“吉本信仰”の幻想性	ひたぶるに時代の伴走者として	21
十一月二十五日の生と死	吉本隆明と三島由紀夫の明と暗	29
誕生命日の交々	“戦後思想の逆立”と吉本転向問題	37
肉をして語らしめよ	無謬教教祖あるいは死屍に鞭打つサディスト	45
合縁奇縁はた迷惑	一九七〇年十一月二十五日、三島事件当日	53
美の悦楽、義の戦慄	贅へと同化せんがための肉体回歸願望	61
道行きの『唐獅子牡丹』	死に至る病あるいは虚無への供物	69
天才的詐欺師	などてすめらぎは人間となりたまひし	77
嗚呼「十二月八日」	緒戦の勝利への歓喜と歓声の中でこそ	85
君は大江作品を読んだか	世界秩序維持へのアンガージュマンとして	93
自分の穴の中で	あいまいな私の中のあいまいな私	101
獣は歩き、虫は這う	天下“類弊”のとりかへばや物語	109
文壇ボスは、今、“男盛り”	丸谷才一訳『ユリシイズ』の誤訳迷訳傍迷惑	117

「魔女が島」の花つぶて	マゾヒズム解せずして『ユリシイズ』は語れず	125
墮落への衝動	負 マゾヒズム に向けてのファナティシズム	133
余計者の悲哀	マゾヒスティックな墮落としての乞食願望	141
泣くな、複雑に笑え	矛盾撞着そのものとしての裸の小林秀雄	149
人は獣に及ばず	宗教本来の恐怖の深淵を覗かせたオウム	157
文壇村の回遊魚	山口瞳『男性自身』織りなすギネスものの無駄話	165
人は見かけによらず	ヒューマニスト椎名誠の権力志向度	173
十字架と踏み絵	文化勲章受賞せし狐狸庵の転びの哲学	181
ユダありて	『沈黙』の背徳願望と自己凌辱のマゾヒズム	189
人情を貫けば志生ず	大朝日新聞社刊『遺書』と松本人志現象Ⅰ	197
皆の者、頭が高い!	大朝日新聞社刊『遺書』と松本人志現象Ⅱ	205
大作家といえど人の子	大江健三郎のかくも軽く虚しき「断筆宣言」	213
歴史は遠くなりにつけり	地上げ整地 リストラ されし明治の偽史的進歩と向日性	221
人生下から仰ぎ見て	人をたずねたくば勝手口から訪うべし おとな	229
言葉よ、甦 よみがえ れ!	藤村『破戒』は初版本に拠るべし	237

遙けくも明治、ローマ……………	バブルはじけし後、司馬に塩野七生を重ねれば／	245
名をこそ惜しめ豚たちよ……………	猫も杓子も賢治ブーム、”やはり野におけ蓮華草”／	253
暴力の義務……………	『太陽の季節』と怒れる若ものたちのゆくへ／	261
フリチンの羞恥心……………	江藤淳は政治を語るな、文芸に戻るべし／	269
子供らの「方三里」……………	ウェルズ『モロー博士の島』の人類退化の法則／	277
目から鱗が……………	出家遁世せし瀬戸内寂聴の子宮の生臭さ／	285
仮面の告白……………	勝手口より通じ合ひし狐狸庵先生／	293
すべては押しつけなれば……………	平和憲法「第九条」を創案したのはSF作家／	301

愚行の三段跳び

——偉大な通俗は偏狭な純文学おたくに勝り——

今、物書きの過半は手書きでなくワープロ執筆であるようだ。ぼくのようなペン書きはもう少数派になってしまった。

年賀状もワープロ主流、加えて文面挨拶は印刷された画一生産、金太郎飴の如くにどこを切っても同じ顔、ただ違うのは宛先の郵便番号と地名に人名、それすらワープロなので、年賀状にはもはや表情というものがなくなって久しい。ぼくは表記も文面もペン書きで通している。当然、宛先によって文面は変る。親疎しんそにより自ら定まるは理の当然、辛楚しんそまた定まり、鬱陶しい苦業を強いることは相成るが、この苦業には来し方かた、行く先の茫々の思いがあり、それでなお一面の慰楽を感じるのである。

“違いの分る男” 第一号でコーヒーマシンに役買った遠藤周作は今度はワープロの推奨に一役買った。よほどのワープロ派かと思いきや、これは頑固な鉛筆派であるらしい（朝日新聞'93・12・

28夕刊)。

愛飲しているわけでもないコーヒーを飲み、愛用しているわけでもないワープロ使用の擬態で視聴者を惑わせるのはちと解げせませぬ、といった咎とがめだての意図は全くない。これも彼一流の韜とう晦はいによる、〃狐狸庵こりあはな〃、効果は洞角どうかくの如ごとくに虚うつろなるはもうご当人とうじんとつくにご承知しょうちの上の遊びの一種にすぎぬこと、視聴者もとよりこれまた承知しょうちの上での狎なれ合いの〃やらせ〃、神は沈黙しんもくすれど信徒は民の竈かまどの賑にぎわいさながらの饒舌じょうぜつも、踏ふみ絵えなき世のめでたさを、大いに慶賀けいがすべき由よし無し言ことと判はずべきが作法というものであろうか。

しかし、ほくなぞのペン派に対し、鉛筆派とは同じ手書きしゅしき遵守じゅんしゅといえど凄すこみが違う。一步下いっぺくだがるに如ごとくはなし、トンボや三菱鉛筆みつびしに肥後守ひごのまもなどの小刀こがたなで削りなす木屑きくずにカツコよく尖とがらせるしんさき芯先しんさき、消しゴム加えての懐かしい文房具の臭においが渾然こんぜんと匂におい立つを思えば、セーラー万年筆やモンブランを以もつてしても鉛筆には抗かしがたく思う。

さはさりながら、鉛筆にはHありBあり、遠藤周作はそを使い分け、『深い河』のような純文学にはHBを使い、エンターテインメントには3Bをお使いとか。読者を疲れさせないエンターテインメント向き文体には柔らかい3Bが合う、ということである。本年(一九九四年)正月から朝日新聞朝刊に連載開始の歴史小説『女』は、3Bで書かれるものだというから、これは純文学ではなくエンターテインメントであることの宣言である。

こここのところで、ほくは少しく混乱するのである。ベルリンの壁は崩れ西も東もなくなった時

節、今だに文壇界にあつては純文学とエンターテインメントの境界は三十八度線の如くに厳存するの、との驚きである。とはいいいながら、本稿でその境界がどのような一線を以て国境となすのか、を論じるのはさしあたつての趣旨ではない。また、遠藤周作について述べたきことあるとしても、それはあとあとのこと、さしあたつての深入りは今のところ控えることにする。

本稿は、「あとがき」もどきの「まえがき」というか、一種の助走部分のつもりである。助走に勢いがつけば、「天使も踏み込まぬ場所に、愚者なればこそ足を踏み入れ」る愚行の三段跳びを演じる惧れに半ば怯えを感じるの、ありていに言つての多くの本音である。ただ、愚者の特権として敢ていえば、「神聖冒瀆」への畏怖の念いが、まことに「鈍」であるということかもしれない。

ぼくらの世代（当年六十八歳）で、多少は本好きの若者として過ごした昭和ひとけたから二十年代にかけ、純文学は黄門様の印籠の如くに権威そのものであつた。第一、なぜ文学と、「学」の名称が付されるのか、そのことに淡い疑念を抱きつつも、とにかくは、ミソクソ区別なしの乱読であつた。芸学とはいわずに芸術という響みに倣ひて文術とでもすべきか、これは学問に非ず、文学を編む技芸の技術ではないかと低徊頻りの拘泥があつた。novelを大説となさずに小説との訳語、坪内逍遙の控えめながらの功績ともいえようか。

ともあれ、乱読の功德は、多くを読み多くを忘れることにあつた。それでも、淬の如くに体にしみつくものがある。水垢かもしれないが赤錆かもしれない、さりとて垢と錆によって与えられる愉楽

は思春期の不安動揺を慰藉する変えがたい揺籃となった。『純』も『通俗』も『講談探偵空想科

学エログロナンセンスまんが三太郎の日記綴方教室田舎教師芋虫人間椅子痴人の愛金色夜叉善の研究吾が闘争風と共に去りぬ高野聖或る女放浪記のらくろタンクタンクロー蟹工船自然と人生五重塔……巖窟王洞窟の女王噫無情脂肪のかたまりナナ悪の華……』切りもないのでやめるが、ミソクソごった煮のありさまで、これら小説類、国籍を問わず前歴学歴年齢性別を問わぬ外人部隊のような我が駆込み寺の観を呈した。ばくはかくて雑食を旨として、育ったのである。

文学は決して学問ではない。あえていえば酩酊をもたらすものである。健康にいいものとは思えない、だが止められぬ。この毒素の廻りがじんわりと心にしみていくときの快感は、えもいえず心を魔する、遠藤周作も、鉛筆の使い分けなど心を労するなかれ、である。でないと、第一、新連載『女』が言う通り日本版『巖窟王』を目途とするのであれば、大デユマに失礼な話ではなからうか。

偉大な通俗は偏狭な『純文学おたく』に勝ること理の当然で、同時に、真に偉大な純文学は、その内部に、これまた偉大な通俗を胚胎せるによつて成り立つのである。『罪と罰』も『戦争と平和』も『スペードの女王』『メゾン・テリエ』『タラス・ブーリバ』も、これ、偉大な通俗であり偉大な文学であり、俗も純も渾然として分がちがたきことを知るべし、これ独り筆者のみの僻事であろうか。

モンテルランの振りで言ってみよう。日本は束にしてきつく紐で締めつけるといい香りをたて

るが、ゆるめると腐臭を発する花のようなものだ。日本が匂うためには、むしろこれを虐待しなければならぬ。

ほくらは虐待の時代に生きた。活動写真大好き少年にとって、地獄の季節と言えた。まず映画館へは原則禁止である。例外として許されるのは文部省推薦の映画に限られた。それも、学校から許可証をもらい、なおかつ父兄同伴というのが規則である。でないと、常に盛り場を巡回している各学校教師らの生徒生活指導組織、「教護連盟」とやらの教師の誰彼に見咎められ、映画館出入り現場を押えられるとまず三日間ぐらいの停学を食う。その常習ともなつて睨まれると、三日が一週間、一週間が十日、一カ月となり、ついには放校の可能性さえもあった。

その禁あればこそ、かえつて映画は甘美な誘惑で以てほくらを誘った。商店の小僧か店員風に変装し（制服・制帽を脱げば済む、簡単なこと。でも禁を犯す放胆さが必要）、映画館の闇の中に潜み入る（当時、場内は上映中、真の闇となる）。発見されるというリスクを犯す度合いだけ、スクリーン（銀幕といったほうがピッタリするが）を見詰める熱度、集中力が違う。洋画、邦画を問わず、手当り次第、キネマ旬報ベストテン入りの名画からチャンバラ、活劇、恋愛、化物や怪奇物、手当り次第の雑食であった。

信じ難いことに、小説類もまた禁断の世界であった。歴史をはじめとする教養書は良しとするも、小説を読むなどは墮落の始まりとかで、家庭ではともかく、小説類を学校へ持参することは固く禁じられたのであった。

極端な言い方をすれば、漱石の『吾輩は猫である』の冒頭部分と『坊つちやん』に『草枕』、独歩の『武蔵野』あたりは許されても、他は許されぬ。当時、隠れての回し読みで、意味も分らぬ語彙ながら、その韻律の良さで暗誦してまで口ずさんだ樗牛の『滝口入道』など、禁じられるまでには至らなくとも、軟弱さ故に推奨さるべき小説とは見做されなかった。軟弱なだけではなく、あの美文がいけない、美文というものは裝飾過多で内容空疎に陥りがちだという。作文教育の文章作法に弊害あり、というわけである。文章というものは、過飾を去り実を踏まえ、簡潔でなければならぬことになっていた。

どの世界にも神様という存在があるもので、当時、小説の最高神は志賀直哉であった。エロゲロナンセンスから探偵猟奇、恋愛物の軟派小説から大衆時代小説と、文筆世界はさながら山の裾野の広がりから中腹へかけ、さまざまな分野への住み分けがなされていた。住み分けはあってもタテ社会の序列というものがあり、多分、九合目あたりに越えがたい関門があり、以下を大衆通俗、今ふうにいってエンターテインメントといい、更にその裾野の下に、地上にも出ることできぬ地下人の扱いで地下出版物、更に雑多な艶笑読物があるので、地上どころか山の何合目かにも這い上るを許された通俗小説は、それなりの地位を占めていると言わねばなるまい。

それでも、その通俗を称して *entertainment* とするのは、余興の道化、谷崎ではないが「幫間」を連想するではないか。それも立派な「芸」ならば、通俗文芸はエンターテインメントよりしく人生という「座」のもてなしの余興役として愛でられる効用だけは認めよう、ということでは

あろうか。まかりまちがい、これを *entertainment* とすればそうはいかぬ、汚れ、墮落、腐敗へ導く元凶ともなるので、いっさい追放扱いにもなりかねない。いずれにしても、相応の高みに達することありとしても、山頂近くへは踏み入れないのである。

そこは、天皇を取り巻く藩屏に重臣、閥族に連なる高貴な方たちの住まいなす聖域の如くに、純文学という名の聖域が存したのである。いかに純なるかの純比べをやりあい、ラッキョの皮剥きの如く、純粹度の純度の不純を互いに剥ぎ取り合っていけば、最後には何もない虚があるのみを如何にせん。

その純文学世界の山頂付近を占拠する一統を白樺派と称び、その白樺派のご神体が志賀直哉なのであった。文学の神様、文章の神様の威光あまねく、龍之介や太宰をはじめ、その威光にふれたの討死に話は十指に余るほどであろう。今現在、直哉の威光がいかにほどに神話的であつたか、今の漱石、漱石と草木もなびく当世読書界氣質の風潮くらいでこれを類想することはとてもできぬほどの宗教的現象を生じていたのである。

大谷崎という、或いは大乱歩という。大の字がおのずと身について不思議ではないご両所ではあるが、当時、谷崎など純文学にはまっとうに入れてもらえぬ異端の耽美・悪魔派で、過飾にすぎた文体は悪文で、その内容たるや悪書の見本の如くに見做され、はくら、これを読むには便所の煙草の隠れ喫いのようなスリルを味わったものである。ましてや乱歩とくると、以てのほかの淫行に価する行為と見做された。

この「禁じられた遊び」の禁止の度が紐の締めつけのようになきつく読書が虐待されると、逆もまた真なり、神を疑い禁断の木の実の味を知ることとなるのであった。書に淫するは体によくない。ばくは淫するほどまでの、たとえば谷沢永一ほどまでは淫してはいない。だが、その病菌の保菌者ではあるらしい。一種の病人である。病人には健全者には見えぬ異風景を、時として見ることもある。いや、感じることもある。それら、これからご報告に及ぼうとするわけだが、さて、どんなルートをたどってご報告に及ぼうか、実はまだ思案中なのである。

なにゆえ 何故、勝手口なのか

——勝手口からの体感による闖入——

なぜぼくは、玄関からではなく勝手口から覗くことにしたのか。

本来、他家を訪うには堂々と正面玄関の呼鈴を打ち鳴らし、美装凝らした主婦のこぼれるような笑顔で迎えられ、揃えられたスリッパで磨かれた床を踏み、空調の利いた応接間のクッションに深々と腰を下ろし、茶菓や、時にはアルコール類の饗応で気分を寛がせつつ、主婦の先触れにつづいて入ってくる当家の主人の懇切な挨拶に、徐に札を返しつつ来意を告げる。この間、注意力を喚起しつつ、この家の構造の概略、家族から生活程度からいろいろと類想を巡らしていく。これが訪問の手順であらう。

だというのに、それを玄関からではなく勝手口から、しかも予告なしの訪問などとはどういう見であることか。

玄関からの手順を踏んでの訪問者と、勝手口からの御用聞きや出前の配達人や、まして物乞い

にも等しいような胡乱な来訪者とは、これに応じる主婦は、殆ど別人に見えるであろう。おそらく主人は顔も出さぬであろうし、主婦の笑顔の繕いは終演後の舞台の取り壊されつつある小道具類の残骸のように素っ気ない、化粧っ気なしの素顔に戻ってしようし、そこには、玄関靴箱の上に飾られた壺や花瓶や季節季節の花々の香りの代りに、〃燃えるゴミ〃 〃燃えないゴミ〃に仕分けられたゴミ袋と、乱雑な突っかけに草履、流しには食べ残しの食器類が重ねられ、生ゴミがまだそのまま、生な生活の匂いが直に鼻を打つ、といった光景を目にすることができよう。

確かに、玄関には人の氣分に阿るが如くに整序された秩序と体系がある。勝手口には、もちろん水廻りの部分として湯殿に便所も込めていえることだが、他人には見せられない秘所としての放埒がある。玄関が上半身とすれば勝手口は下半身であろうか。玄関が精神とすれば勝手口は肉体であろうか。玄関が学問だとすれば勝手口は生活であろうか。

しかし、玄関も勝手口も同じ一つ家のもので切り離せない。切り離せないが、人は玄関がなくとも勝手口があれば生きられる。精神か肉体かの二者択一的な神学・哲学上の大テーマの論題は、今、何ほどの意義をも持ち合わせてはいない。精神は肉体による重要な分泌物ではあっても、その逆は成立しない。玄関が勝手口を造ったのか、あるいは勝手口の活力範囲の規制を受けつつ玄関は二次的に造られたのか、この順位の立て方に関しての、贅言の要もあるまい。

比較的早くにはくは文字世界になじみ、禁じられた読書、つまりは良書といわるものを傍えにしてむしろ悪書と排斥され侮蔑さるるものへの、いわば判官顛履じみた気分からの親近性をも